

大阪・関西万博からのメッセージ

一瞬の輝きを一生の思い出に



万博からの
メッセージ

古川 佳和*

Message from Osaka Kansai Expo 2025

Turn a moment of brilliance into a lifetime memory

はじめに(万博に対する個人的な想い)

筆者である私は1970年生まれ。1970年といえば日本ではじめて国際博覧会が大阪で開催された年である。学生時代には自己紹介で大阪万博の年に生まれたと言え、年上の先輩方はたいてい自分自身が何歳の時に大阪万博に行ったかで年齢差を知り、私に大阪万博であった思い出を語ってくれるのである。万博というイベントは訪問した人にとって未来へのあこがれを体感する思い出の場であったのだろうなと思っていた。それは私と同年代や少し上の先輩方の名前に「博史」や「博子」のように万博の「博」という字がついていることから当時の万博の盛り上がりや連想させる。そんな先輩方がそんな思い出を語りたくなる万博というイベントがどんなに心に残るものなのかを学生時代から感じていたのである。

博覧会は国際博覧会だけではなく日本では1980年頃から博覧会ブームが起り、関西では1981年に神戸市の神戸ポートアイランド博覧会、1987年に大阪市天王寺区の天王寺博覧会が開催され私も家族に連れていってもらったことを印象深く覚えている。

1990年には大阪市鶴見区の鶴見緑地で国際花と緑の博覧会(大阪花博)が開催されることが決まった。これは絶対に行かねばと早々に前売り入場券を購入。その入場券に記載された開催年が「昭和65年」となっているのが早期に購入した証となっていた。

(平成に改元され、ほとんどの入場券には「平成2年」と記載されていた)

そんな私も社会人になり、自分で稼げるようになり収入も得て、遠出もしやすくなり、2005年に愛知県で開催された2005年日本国際博覧会(通称:愛知万博)では朝いちばんの新幹線に乗り込んで計4回訪問することになった。万博は何度行っても新たな発見があり、楽しいだけではなく未来を感じさせてくれるモビリティや展示やイベントが多くあり、自分の人生の中でもあんなもの見た、こんなことあった、などその後もずっと自分の記憶の中に深く印象を残すものばかりだったと思う。

そして2025年に地元大阪・関西に国際博覧会がやってくるのが決定。大規模な万博である「登録博」が日本で開催されるのは20年ぶり、大阪で開催されるのは55年ぶり。一生に一度か二度行くことがないであろう国際博覧会が大阪で開催されるならば、悔いが無いよう思いっきり万博を堪能してやろうと決めたのでした。それだけではなく、私のまわりの人にも万博を知ってもらい、万博を訪問することで一生の思い出になるべく、私自身が万博に対する想いを業務とは関係なく「発信」していくことを努めることにした。

大阪・関西万博の開催が決定したのは2018年11月。私が勤務している大阪商工会議所では開催決定前から万博誘致を積極的に行っており、開催決定してからは万博推進のために万博のPR活動を続けていくことになる(図1)。当初はメディアもまわりの人も万博開催についてはネガティブに捉えられていた。また新型コロナウイルスの蔓延によるイベント自粛や物価や資材の高騰などを受けて万博開催までずっと向かい風の連続。ただ過去の事例からも100%完成された状態で始まっておらず、開催終盤が近づくと混み始めるなどしていた事実があるので



* Yoshikazu FURUKAWA

1970年10月生まれ
大阪市生れ大阪育ち
1993年大阪商工会議所に入所。入所後から一貫して中小企業の情報化支援に取り組む。万博とは直接業務とは無関係だが万博に対する想いは熱い。
E-mail: y-furu@osaka.cci.or.jp



図1 大阪・関西万博開催まであと1138日の掲示
(2022年3月22日撮影)

私は心配しておらず、私ができることをやっ
ていこうと「万博への期待」を発信し続けてい
くことにした。

大阪・関西万博について

今更ですが大阪・関西万博の概要について記述す
る。正式名称は「2025年日本国際博覧会」。国際博
覧会には国際博覧会事務局(BIE)が認定する「登録
博」と「認定博」の2種類の区分があり、2025年
に開催された大阪・関西万博は5年に一度開催され、
規模が大きく、より広範なテーマを扱う「登録博」
と位置づけされている。会期は2025年4月13日
から10月13日までの184日間で、テーマは「いの
ち輝く未来社会のデザイン」、シンボルとして周
囲2kmに及ぶ木製の「大屋根リング(図2)」であり、
世界ではじめて海上で開催される博覧会となり、会
期中に約2,902万人が来場、当初の目標来場者数は
2,820万人を上回る結果となった。



図2 万博のシンボルとなった巨大な「大屋根リング」

公式キャラクターは「ミャクミャク」(図3)と
いう名前で細胞と水が一体となって生まれた不思議
な生き物。キャラクターが決定した当初は賛否両論
あったが、万博が開催してからは多くの人に愛され

るキャラクターとして成長したと思う。キャラクタ
ーグッズも当初はあまり見向きもされていなかった
が、閉幕が近づくにつれて会場内のオフィシャルス
トアが連日満員で入場制限がかかるほどで、万博が
閉幕してからも会場外の万博オフィシャルストアが
継続して営業するどころか、閉幕後に新たに公式シ
ョップがオープン、売り場面積を拡大するなどして
連日多くの人が詰めかけてくるため売り場を入場制
限するなど盛況のようだ。



図3 万博の公式キャラクター「ミャクミャク」

万博が開幕

2025年4月13日に大阪・関西万博が開幕。筆者
は大阪市在住で中央線沿線に在住・勤務である地の
利を活かして、早期に通期パスを購入し、できるだ
け多く万博会場を訪問しようと決めていた。

その開幕前の前週に、最終チェックとなる「テス
トラン」が関係者、ボランティア、応募抽選で選ば
れた大阪府民を対象に4月4日～6日まで3日間
開催された。筆者は縁あってこのテストランを3日
間とも参加することが叶った。このテストランで初
めて万博会場に入った時のことをいまでも鮮明に覚
えている。今回の万博会場は未来社会の実験場でも
あり、あらゆるものがデジタル対応しており、個人
が所有するスマートフォンやパソコンなどのデジタル
デバイスを活用することで万博をより楽しめるもの
にしている。ただ、そのデジタルデバイスを動かす
ためのインフラ環境が必要となり、電源やネット環
境が欠かせない。まず入場ゲートを通るためにネッ
トにアクセスしてQRコードを表示しなければならないが、テストラン初日に個人所有のスマホのバッ
テリー残量が残りわずかとなってしまい、会場内で
充電できる場所を探すところからはじまった。

まだ情報がなかったため万博会場の中のことがわ

からず、テストランではその内部の情報を得るため、できるだけ多くの写真を撮り、またパビリオンを訪問して何があるのかなどを記録し、勉強会やSNS等で情報発信をすることに努めることにした。万博開幕後も、業務で関わる方や、これから万博を訪問する仲間に向けてfacebookを使った情報発信を続けることにした。

会期後半は混み合うことが予想されていたため、休みの日はもちろんのこと、平日も仕事帰りにほぼ毎日、夢洲へ向かい、万博会場内のパビリオン訪問やイベントに参加し、5月末日には全パビリオン訪問を達成することができた。まだ早い時期だったおかげで当日の来場予約ができ、会場内では並んでいないパビリオンを効率よくまわり、予約必須のパビリオンも比較的取りやすかったのが功を奏した。

この情報発信と全パビリオン制覇したことがきっかけとして会場で講師として招かれることが5回、新聞社に取材されネットや紙面に掲載、地方ラジオでのゲスト出演、eo光チャンネルのネットのテレビ番組でお笑いコンビのアキナさんと共演させていただくなどの貴重な機会をいただいた(図4)。



図4 お笑いコンビ・アキナさんとの共演

当初はスタートダッシュでの万博訪問で、そのあとはのんびりする予定でした。しかし、万博会場では日々、魅力ある大きなイベントが繰り広げられ、また各パビリオンなどで提供される飲食も多数。パビリオンだけではない万博の魅力に感じて通い続けることになり、最終的には会期終了まで109日・117回(1日に2回訪問した日がある)も万博訪問することになった(図5)。



図5 月別訪問記録(※AD証で入場した1回分を除く)

大阪・関西万博の醍醐味

なんといっても一生に何度も行くことはない万国博覧会が大阪にやってきたことに尽きる。通期パスさえ所持して当日来場予約さえできれば気軽に万博会場に通うことができる。世界中の人が大阪に集まり、日本に居ながら世界旅行ができるのは魅力だったと思う。一般市民として世界の人や文化、そして飲食を体験できるのもあるが、ビジネスとして考えても各国とのセミナーや商談会が頻繁に開催され、新たな海外取引も生まれ、日本にとっても大きな商機になっている。

当初は国内の企業パビリオンや、今回の万博のテーマ館ともいえるシグネチャーパビリオンなどを中心にまわろうと考えていたが、開幕してしばらくすると海外パビリオンが楽しく、その魅力にハマった。これまで国名や都市名は知っていたとしても、その国のことを知らずにいたことを思い知らされることに。海外パビリオンのスタッフがみんなフレンドリーで声をかけてくれたり一緒に記念撮影に応じてくれたりして大阪に居ながらたくさんの国際交流が実現(図6)。現地の音楽・舞踊・衣装・パレードやステージで楽しませてくれるイベントも満載でまるで世界規模の文化祭が半年間続いているもの、と思えてきた。

なかでも一番印象に残っているパビリオンはハンガリー館。まだ開幕して間もない頃、仕事帰りに万博会場を訪問し、誰も並んでなくてすぐに入ることができた。失礼ながらハンガリーという国がどこにあってどんな国なのかも知らないくらい知識がない状況。そんなハンガリー館で出会ったのは現地の民



図6 フレンドリーなドイツ館のスタッフ

族音楽の鑑賞。暗闇の中にピクリとも動かない白い服のお人形さんがいるかと思えば、人形ではなく生身の人間で、突然動き出したと思えば民族音楽を唄って踊り出す。何を言っているのか言葉がわからない。それでも神秘的で魅了されてゆく。それから「一番良かったパビリオンはどこでした？」と聞かれたら迷わずにハンガリー館と答えるくらい。当初は「え？ハンガリーですか？意外！」という反応も多かったのですが、閉幕日が近づくにつれ人気パビ



図7 ハンガリー館の歌姫

リオンのひとつとなった（図7）。

そのハンガリー館ではもうひとつ大きな思い出がある。それはハンガリー館に併設されているレストラン「ミシュカ」を訪問したく、何度も立ち寄ってみたものの、満席もしくは閉店ばかり。開店時間も何度か変更になり、なかなか訪問できず、半ば諦めかけていた時に閉幕が近づいていた10月11日、知人のHさんも私と同様に朝9時に万博会場に入

場していることを知り、朝からハンガリー館のレストランに並ぶことに。レストランの開店時間は13時で、4時間は待つのを覚悟して並んだが、実際には6時間以上並んだ。その時、時間もたっぶりあったことから、同じくハンガリー館のレストランで並んでいた方と話すようになった。待っている間に、限定のギニアビールを買ってきて一緒に飲んだり、トイレや別のパビリオン訪問している間の留守番を交代したりしているうちに、別々のグループだったはずの4人が16時に入店したときには同じテーブルで囲みハンガリー料理とハンガリーのワインを堪能しながら、昔からの知り合いかのように楽しく過ご



図8 ハンガリー館レストラン「ミシュカ」にて

すことに（図8）。その時に知り合った方の旦那様が、筆者と同じビルで働いている方だと後で知り驚くことに。そして今回の執筆依頼のきっかけになった。今回の万博では、閉幕に近づき来場者が増えてくることによって、どこのパビリオンも並ばないと入ることができない状況になり普段並ばない大阪人が並ぶようになったと揶揄されているが、普段から会話の好きな方々が多いとされる大阪人が並ぶことによってはじめて会う人との会話がうまれ新しい交流が万博会場のあちこちで生まれているのではないかと思う。

主催者側と来場者側の創意工夫

今回の万博会期中に感じたことは、何か問題が発生した際に早期に改善するように主催者側が迅速に対処していたように感じる。もともと新しい取り組みに対して想定外のことが起こるのは当然のこと。例えば閉幕日は多くの来場者のため携帯キャリアの通信回線が逼迫してネットが利用できない状況が起

きていたが、ゲートに Wi-Fi 環境を整備することに加え、災害地派遣に活動するような携帯アンテナを搭載した車が配備されていた。また当日予約で長い行列ができる場所は、多くは並ばせない、紙の整理券配布、予約制に切り替えるなど柔軟に対応。熱中症を防止する観点から日傘をレンタル、日差しを避けるよう大屋根リング下に列を作るなど臨機応変に対応していた。

万博関連の予約システムは正直言って使いづらいものが多く、そのため一般の個人が使い勝手が良いツールや便利なツールを自ら開発して提供したのも特徴的だった。その中でも京都工芸繊維大学の学生「えび」さんが作成したもので、当日予約可能なパビリオンをわかりやすく一覧表示して予約ができるツールは筆者も現地の当日予約で活用した (図9)。中にはサイバー攻撃と思わせるような動きをする野良サービスも登場し、必ずしも良いものばかりとは言えないものの万博をいかに有益な情報を得て楽しむか、各自で創意工夫されていたように感じる。



図9 「えび」さんが作成した当日予約状況一覧

あと多くの方がお世話になったと思われるものが、「つじ」という社会人の一般の個人が作成した万博会場の地図で、ネットで公開されると公式マップよりも使いやすいために広く普及 (図10)。これも来場者自らが生み出した知恵であり、皆が多様に創り共生する、という万博のテーマにも合致する行動だといえる。

万博がきっかけで変わったこと

今回の万博は会場も広く、東ゲートから西ゲートまで歩くだけで20分はかかる。また大屋根リング

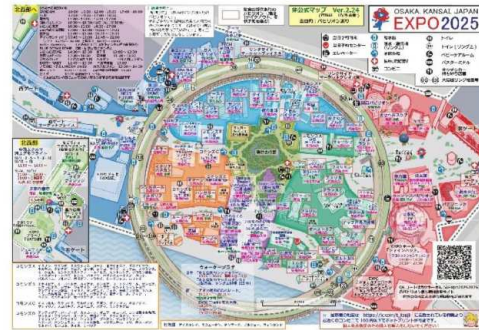


図10 「つじ」さん作成・公開の地図

の上に登り1周するだけで2キロ以上歩くことになり、知らず知らずのうちに運動していることに気づく。仕事帰りのビジネスシューズで長距離歩くと足の裏に水ぶくれができるほど。その結果、万博に通い続けているだけで体重が5キロ落ちた。

また、前述したハンガリーだけじゃなく世界各国の産業や観光を知るきっかけになった。特に中東国の方々の奏でる音楽の魅力に気づく。世界各国の料理を楽しむことができたのをきっかけに、万博会場外の各国料理店を探すことに (図11)。またポルトガル由来のお菓子で「パステル・デ・ナタ (エッグタルト)」が各国で味や食感が全然違っており、それ以来、あちこちでエッグタルトを見たら食べたくなるマイブームが起こっている。アンゴラ館やモザンビーク館でエッグタルトが売られていることで、昔はポルトガル領だったことがあったことを知る。



図11 万博会場で食べた世界各国の料理

飲食でいえば、今回の万博会場のあちこちで各国のビールを飲むことができた。そのうちのチェコ館の元祖ピルスナー・ウルケルを「ミルコ」という泡

ばかりの状態で飲む楽しみ方を知った。それ以来、生ビールサーバーで誤って泡だらけになってしまっても「ミルク！」と呼んでありがたく呑むことに (図12)。



図12 泡ばかりの「ミルク」という呑み方

おわりに (万博が終わって)

万博会期中のうち半分以上を万博訪問に費やした。そのためか万博が終わってからも、万博の痕跡をたどるアフター万博を楽しんでいる。万博関連イベントがあると足を運んでしまう。万博会場に設置されたモニュメントなどが大阪の至るところで展示・公開されているのもうれしい限りで、職場の1階にも大阪ヘルスケアパビリオン前に設置してあったオオカミの椅子が置かれている。この椅子に座るだけで万博を感じることができる。

京都大学の学祭イベント・北部祭典の中で、シグネチャーパビリオン「EARTH MART」の回想企画

展というのがありそちらの特別講演会とワークショップへの参加の抽選申し込みがあり、一般でも参加できることを知り、応募すると当選したのでそちらにも参加。今だからこそシグネチャーパビリオン企画の苦労がわかることもあり、もう一度見てみたかったな、と少し後悔している。



図13 EARTH MART回想企画展

これまでの万博は、高度成長期の頃だったからか「成長の祭典」。しかし今回の万博では、「共生・共創の世界を作り上げるための実験場」であり、今回の万博のテーマでもある「いのち輝く未来社会のデザイン」を実現するための展示や体験だったのではないと思う。今回の万博を一生の思い出になるだけでなく、万博に行った人、出会った人、みなさんにとっても一生の思い出となるよう、万博をこれからのひとたちに語り継いでいくためにも記憶を記録していきませんか。

